

県高校選手権 御影高校が県代表に

高校選手権兵庫県大会

県大会は各地区予選を勝ち抜いた24チームが出場し、11月2日から11月10日まで、神戸中央球技場ほかで行われた。その結果御影高校が3-0で御影工高を下し、全国大会出場を決めた。

〈1次リーグ結果〉

- ▷Aグループ ① 御影工 2勝 ② 尼崎北 1勝 1敗 ③ 志知 2敗
▷Bグループ ① 三木東 2勝 ② 伊丹北 1勝 1敗 ③ 六甲 2敗
▷Cグループ ① 明石北 2勝 ② 伊丹西 1勝 1敗 ③ 育英 2敗
▷Dグループ ① 北須磨 2勝 ② 姫路西 1勝 1敗 ③ 篠山産 2敗
▷Eグループ ① 御影 2勝 ② 福崎 1勝 1敗 ③ 明石西 2敗
▷Fグループ ① 神戸弘陵 1勝 1分 ② 赤塚山 1勝 1分 ③ 飾磨 2敗
▷Gグループ ① 三原 2勝 ② 県伊丹 1勝 1敗 ③ 市尼崎 2敗
▷Hグループ ① 滝川第二 2勝 ② 龍野 1勝 1敗 ③ 豊岡 2敗

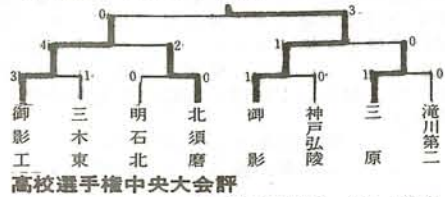
決勝トーナメントは11月6日から磯上球技場・中央球技場で全国選手権出場を目指して戦われた。

▷決勝 (11月10日 神戸中央)

御影 3 (2-0) 0 御影工

【評】決勝戦は13時に開始され、20分御影のCF栗井健嗣が御影工業のパスを奪ってシュートして先取点をあげたのに続き、ゴール前でこぼれだまも押し込んで2点をリード。さらに後半も金相換の左からのセンターリングを栗井が、ヘディングで、ゴール左上へ決めた。一方、御影は後半に攻撃をかけ、再三にわたり、御影のゴールを襲ったが、GKの好守にはばまれ、57年と同じく御影に敗れた。

〈決勝トーナメント記録〉



高校選手権中央大会評

本年度より試合形式を第一次リーグ、決勝トーナメントという形に改め、各支部代表24校によって実施された。予想通り第一次リーグより激戦が展開され、早くも総体第三位の福崎や優勝候補にも挙げられた伊丹北が姿を消した。結局、神戸の3チームと淡路1チームが、ベスト4に進出し、全国大会出場権をかけて激突し、攻守のバランスがとれた御影が二度目の優勝を成し遂げた。

この大会では三木東や神戸弘陵が一次リーグを勝ち抜き善戦をしたもの、やはり戦前から予想されていたように、御影、御影工、北須磨、三原が他に喰い入るすきを与えず、安定した力を発揮し、案にベスト4入りをした。ダークホースと目された明石北や滝川第二もさすがに強く、よく勝ち進んだが、心配されていたようにメンタルな弱点を覆いきれずに敗退した。神戸、淡路、東播の勢いに反して、阪神のレベルダウンも特記すべき事ではないかと思われる。

ところで最近強いチームには必ずといっていいほどスーパースターがいる。エースを中心によくまとまったチームが強い。今大会でも御影の勝因はエース金、山中、文箭を中心によくまとまっていた事が第一にあげられよう。御影工の内山、小西、寺内の存在や北須磨の松井、橋本らも同等に評価出来る。

スーパー級の選手育成が我々コーチの課題



高砂県協会長から優勝旗を受ける御影高校大橋主将



御影高校対御影工業の決勝戦から

である。そして個々の選手には基本技の練習をおろそかにせず、基礎体力強化をなおざりにせず、負けじ魂を鍛えて、もっと強いサッカーが出来るよう頑張ってもらいたいと思う。本当は勝てたはずのゲームをこのような力の欠如で、とりこぼしたチームもあったように思うが61年度の総体に向けて一層の努力を望む。

60年度高校選手権神戸市予選

赤塚山、育英、六甲、御影、神戸弘陵、御影工、滝川第二、北須磨が代表に

県大会を前に市の予選が9月8日から10月5日まで、市内高校で行われた。市予選には31チームが参加し、8組に分けて1次リーグを行い各組上位2チームが決勝トーナメントに進出し、県大会に出場する代表の座を決めた。その結果、赤塚山、育英、六甲、御影、神戸弘陵と御影工、滝川第二、北須磨が県大会に出場した。

〈1次リーグ〉〔A組〕1位八代3勝 2位村野1勝1分1敗 3位夢野台1勝1分1敗 4位友が丘3勝 〔B組〕1位神戸3勝 2位須磨東2勝1敗 3位神戸西1勝2敗 4位東灘3敗 〔C組〕1位御影3勝 2位灘2勝1敗 3位兵庫工1分2敗 4位滝川1分2敗 〔D組〕1位須磨2勝1敗 2位兵庫1勝2分 3位鈴蘭台1勝1分1敗 4位長田1分2敗 〔E組〕1位神戸弘陵3勝 2位伊川谷1勝1分1敗 3位神戸高塚1勝1分1敗 4位神港学園3敗 〔F組〕1位育英3勝 2位市神工2勝1敗 3位舞子1勝2敗 4位市神港3敗 〔G組〕1位赤塚山2勝2分 2位六甲1勝1敗 3位兵庫商2敗 〔H組〕1位神戸甲北3勝 2位鈴蘭台西2勝1敗 3位葺合

兵庫県社会人都市リーグ 決勝大会

60年度県下社会人都市リーグ決勝大会は、10月13日新日鉄夢前グラウンドで開幕、10月20日、27日、11月3日、10日、17日、24日、12月1日、8日の9日間、日触姫路、弘陵高校、神戸総合サブグラウンドで行われた。兵庫朝鮮が優勝、2位ヤンマー、3位に竹谷クラブが入り、明南クラブは4位と善戦した。

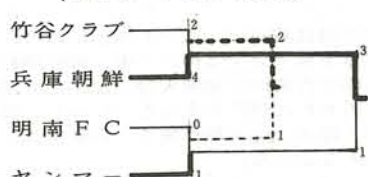
〈1次トーナメント結果〉



〈敗者復活戦〉

神戸税関 1-4 竹谷クラブ
明南FC 2-0 兵庫教員C
兵庫朝鮮 7-5 古河電工
ヤンマー 5-0 KFC・A

〈決勝トーナメント結果〉



第40回国体近畿地区予選少年の部

▷リーグ 兵庫 1-0 大阪 兵庫 2-0 京都
▷決勝 兵庫 3 (2-0) 0 奈良
わかつり国体 秋季大会記録 於鳥取
▷少年1回戦(10月21日) 兵庫2(1-0)1千葉
▷少年2回戦(10月22日) 兵庫2(1-0)0佐賀
▷少年準々決勝 兵庫 0 (0-1) 1長崎

日本サッカーにルネサンスは起こるか？(24)

枚方FC 近江 達

日本と欧米のチームワークの相違

パターン練習ばかりやらされていると、それ以外の状況に対応できなくなってしまう。やらされているチームは弱い。そういう状況になると先生やリーダーの顔を見て指示を仰いだりするから、どう仕様もない。ラグビーの名手 松尾雄治

いまは世界中どこへ行ってもみんな組織的なサッカーだが、かつて欧米には個人技全盛の古き良き時代があった。とくに南米など、華麗な個人プレーで大いに観衆を湧かせたものだが、そうした個人技中心のサッカーはもうほぼ完全に姿を消してしまっただけでなく、ハンガリーなど、数々の名手が生まれた国々でさえ「昔は天才的個人技で戦ったけれども、今はチームプレーに徹しないと勝つことができなかった」と言うのだ。楽しさという点では魅力半減で、なかでも南米の変わりようには淋しさを覚える。

もっとも、こうした本場のサッカーの移り変わりも、有史以来組織サッカー本権で通してきたわが国のサッカー界から見れば、「今までの彼らがあまりにも個人主義的でありすぎたのであって、これでやっと教科書どおりの正しいサッカーになったのだ」と日本式サッカーの正当性に自信を深めている人々の方が多いかも知れない。たしかにサッカーはチームスポーツだから、プレーは有形無形を問わずすべてチームプレーでなくてはならない。これはいうまでもないことである。しかし一口にチームプレーといっても、実際のゲームは組織プレーと個人プレーとのさまざまな組み合わせと連続なので、実態は民族性や歴史、伝統などによって千差万別であり、また時代によっても違う。なかでもわが国の大多数の人々が「チームプレーのサッカーとはかくあるべし」と脳裏に描いているイメージや、伝統的に踏襲してきた実際の日本のチームプレーと欧米のそれとは、本質的にちがうものである。だいいち、選手に対する監督の注文がすにちがっている。

たとえば、トータルサッカーで有名なオランダのミケルス監督は指導法にふれて、「私が皆さんに推薦している攻撃的守備のプレッシング、フットボールは高度の知性、智能、技術、戦術、体力を備えた選手でないとできない。ところが今の若者たちはレベルが低いので困る。そのために、プロになってから6対6などの練習で技術や智能を高めてやらないといけない。昔は子供の頃、毎日サッカーで遊んで自然に巧くなったから、プロではこんな程度練習などいらなかったものだ」と語り、また故バイスバイラー監督なども、「命令のまに動く兵士はいらない。自分自身の頭脳で切り開いていく選手でないとけない」と話しているが、こういう発言は日本の指導者にはほとんどみられない。

事実、元日本代表で現在西独プロで活躍している奥寺選手は、初め日本でやってきたように、言われたとおりにプレーしていると、「もっと自分で考えたプレーをやれ」とよく注意されたそうである。この体験談は両者の重要な相違点を如実に示している。日本式チームプレーは、チームごとに伝統的なパターンが決っていて、それを毎年のレギュラーが受けついでそのとおりにプレーするといったものが多い。だが欧米のはそういうレディメイドのパターンではない。むしろ方針も傾向も指令もあるけれども、日本のような強制ではなく、実際には、ゲーム中に選手たちがそれぞれの状況判断や創意工夫によって作りだす。それが彼らのチームプレーなのである。したがって個人の力のアップがチーム力のアップになる。そこで必然的に、一人ひとりの能力をどんどん伸ばし才能を開花させ、できるだけ高いレベルの自決できる選手にしていく教育が必要となるわけである。

トータルサッカーとかチームプレーの強調とかいっても、重点が個人による打開から組織プレーの方に移っただけで、「個性豊かなハイレベルの選手でないと駄目だ」という欧米の伝統的選手観や需要自体は、以前とたいして変わっていないのである。

日本式チームワークの自縛性

もっとも日本だってレベルの高い個性的選手が欲しいことに変わりはない。でもこの望みはかなえられそうもない。日本式チームワークの世界は、とてもそういう選手が育ち得る環境とは思えないからである。何しろプレーの種類、配合やリズムなどがほぼ決っていて、それこれ奥寺選手が話したように、幼い頃からずっと言われたとおりにプレーし、もし天分に恵まれた選手がいても、あくまでも皆と同じようにその枠内で能力を発揮しなくてはならない。しかもこの枠がずいぶん狭くて管理がきびしいため、枠外とか枠以上をゆく独創や個性は無用であり、下手すると統制秩序を乱す者とみなされ、レギュラーからはずされてしまう。これではハイレベルどころか、当然伸びるべきものも伸びない。だいいち外国なら育ち盛りに何年かサッカーをやれば、たとえ教えられなくても自然に身につけてしまふようなものさへ身につけることができない。わが国では選手自身の判断工夫で臨機応変に対処し打開していくというやり方は正道ではない。そんな状態に陥ること自体失敗だともみるのが普通で、チームワークを乱す勝手なプレーとしてタブー扱いするチームさえ珍しくないくらいだから、相手次第でどうこうと言われたって無理な注文というものである。ただし例外はある。充分ではないにせよ、ある程度創造力や技術のある選手たちが、幸か不幸か作戦命令を守らず自由に自分たちのアイデアでプレーしたときである。リードされて挽回不能になったので、もう指示どおりではなくてもよいと判断して始めた時、作戦どおりやっていた時よりも、そうした試合を

この連載は、雑誌サッカー・ジャーナルに連載されている枚方FCの指導者、近江達氏の随想をサッカー・ジャーナルのご好意で転載しております。



△トヨタカップで個性豊かなプレーを見せるMr.ブラディニ

投げたしまつてからのほうが、創造性があったのだから、何とも奇妙な話である。似たようなことはワールドユース東京大会であった。あのときも日本ユースは堅守から逆襲速攻という伝統的作戦でのぞんだが、全く通じなかったので相当非難の声が上がった。そのためかどうか、やり方を変えて、選手たちのアイデアに任せたと一少なくともそのように見えたところ、大分見られるようになったのである。第二次大戦敗北から40年、失敗の経験を生かさないで同じ失敗を繰り返す国民性はちっとも変わっていないようである。

個人育成を罪悪視する教育界

1967年、少年サッカー育成を始めたとき、私は「ストリートサッカー的な自由度の高い練習法を多用して、少年たちを、誰とも組める個性豊かな高いレベルの選手に育てよう。そうすれば将来大人になったとき、欧米人のように各自のアイデアを噛み合わせて精緻な高度なサッカーを展開できるにちがいない」と考えた。むしろわが国では異端な思想だから賛同者はほとんどない。コーチの会合でも私が「少年サッカー教育はチーム育成中心でなく、個人育成を中心にしている」と話すと、即座にどこかの先生が立って、「私は教育者だから、チームを育てる。サッカーはチームスポーツだから、個人中心は間違いだ」と反対される。学校教育ではサッカーの授業でチームワークを教えることになっているので、チーム優先、一致団結、協調性などを強調しなくてはならない。個人の肯定などとてもないことなのだそうである。そうでなくても、わが国にはただでさえ個人・イコール・エゴイズムと白眼視する社会通念があるから、子供たちは、体育の時間のサッカーで誰かがドリブルしたり、ボールをもって相手を抜こうとしたりすると、「一人で作るな！」などと呼ばふ。そのかわり、ボールもたないで、蹴とばしておきさえすれば、たとえ敵にボールを献上したって、絶対文句を言われることはない。



株式会社 モルテン
広島/東京/大阪/名古屋/福岡/札幌



モンブランの
メインテーマ

基本のプレーを徹底的に追求し、機能性を第一に考えたサッカーシューズ

markam® & Libe/lo®

親しまれるサッカーウェア younger®

リベロメイン06
標準小売価格¥9,800

MONTBLANC

リアル・スポーツの追求
モンブラン株式会社
神戸・東京・福岡